

## 米オレゴン大学へ留学 野球やボランティアで貴重な国際交流を体験

矢澤 佑太くん(商3)



▲オレゴン大野球チームメンバーと(右から3人目が矢沢くん)

国際研修館・学生アシスタントの矢澤佑太くん(商3)は、米オレゴン大学留学中に、野球チームでの活躍や障害者ボランティアを通じ、貴重な国際交流を体験した。

矢澤くんは外務省勤務の父・憲治さんの転勤で子供の頃からスーダン、オランダ、ポーランド、ケニアに滞在した帰国生。

「にもかかわらず英語が話せない。それがずっとコンプレックスだった」と言う。大学に入学した時「一番やりたくない英語に真正面から取り組もう」と留学を決意。一昨年4月から1年半にわたってオレゴン大学に自主留学した。

「生きた英語を学び、現地の人と本物の交流をしたい」と、まず飛び込んだのが大学のベースボールクラブ。専大松戸高時代に野球部キャプテンを務め、強打者として99年春の県大会で準優勝の成績を収めるなど活躍したが、肩を痛めて断念。しかし「大好きな野球をもう一度」という夢を、本場アメリカで実現させた。キャッチャー、外野手としてチームに解け込み、最高打率4割2分7厘を記録する4番バッターとなった。臨時編成のサマーリーグチームにも入り、3カ月間で30試合に出場、MVP、ホームラン王、ゴールデングラブ賞、新人王といったタイトルを独占する大活躍ぶりを見せた。もちろん野球を通じ、多くの友人を得たことは言うまでもない。

さらにサマーキャンプを通じ、障害児と交流するボランティア活動も経験。「この経験を、日本で形のあるものにした」と、昨年9月の帰国後、ホームヘルパー資格2級を取得。国際研修館で短期留学生の生活面のバックアップをする一方、お年寄りのデイケアサービスや子供とのボランティア活動も続けている。

将来は父親と同じ道か、福祉・ケアの仕事をしたいと希望を膨らませている。「みんなが同じ方向を向いている日本より、個人の意見を尊重し、可能性が広がるアメリカでの生活の方が性に合っている。思い切って飛び込んだからこそ、野球でもボランティアでも道が開け、その体験が自分を一回りも二回りも大きくしてくれた」と振り返った。

【ニュース専修5月号13面】

## 新設・中期留学プログラム 英語コース前期(4月～)



▲大林センター長(右)から留学許可書を受け取る伊藤さん(左は鈴木くん)

ワイカト大(ニュージーランド)で伊藤さん、鈴木くんが研修

本年度から始まった中期留学プログラムのうち英語コース・前期(4月～)に参加の伊藤友香さん(経済3)と鈴木康平くん(経営3)がニュージーランド・ワイカト大学で12週間の研修に励んでいる。

同プログラムはワイカト大学、米ネブラスカ大学リンカーン校など本学協定校に3～4カ月間留学し、現地で留学生対象

に開講される集中英語コースに参加するプログラム。前期と後期が設けられ、参加者は英語による実践的コミュニケーション能力の習得に加え、プレゼンテーションやライティングなどのアカデミックスキルや異文化理解について学ぶ。留学期間は在学期間に算入され事前事後の授業を受講し、現地において所定のコースを修了すると本学開講科目に成績評価され、単位が授与される。本学から一定額の補助がある。

3月19日、大林守国際交流センター長出席のもと行われた同コース留学許可書交付式で伊藤さんは「語学習得だけでなくニュージーランドの文化、生活習慣に接し、人との関わりを大切にしていきたい」、鈴木くんは「次へのステップアップへこの留学での経験を生かせるようにしたい」と抱負を話していた。なお、英語コース後期には8人が参加することになっている。

【ニュース専修5月号13面】

## 新入留学生歓迎会と合宿オリエンテーション



▲なごやかにグループ別懇談会

習を見学して楽しんだ。新入留学生は、今後、大学生活を送っていく上での必要な知識を得ると同時に懇親を深めた。

新入留学生歓迎会と合宿オリエンテーションが4月10、11の両日、伊勢原セミナーハウスで行われ、今年入学した留学生、在学留学生、日本人学生、教職員らあわせて約130人が参加した。

初日は歓迎夕食会、グループ別懇談会などが催され、二日目は晴天の下、伊勢原総合グラウンドで馬術部の練

【ニュース専修5月号13面】